

「明治150年」記念シンポジウム

平成二十九年十月二十九日
「明治150年」記念シンポジウム実行委員会主催

明治人・福澤諭吉

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）

左翼リベラリズムが「造作」した福澤像

福澤諭吉は幕末の三十三年を生きて、維新を迎えてから三十三年を生きて、激動の時代を活写し続け六十六歳で亡くなりました。しかし、世に伝えられている福澤の人物像が真実の福澤像とはずいぶん異なっているのではないか。このことをラディカルな観点から問うたのが私の著作『土魂―福澤諭吉の真実』（海竜社）です。

福澤諭吉と聞くと、多くの方が、幕末から明治期に、西洋文明を取り入れて、新生日本を創成すべしと説いた文明開化論者、欧化主義者というイメージが強いのではないかと思います。また、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という天賦人權説を説いた人物だというイメージもあると思います。もう少し詳しい方だと、「政府は国民の名代にて、国民の思うところに従いことをなすものなり」と主張した社会契約説の啓蒙思想家だというイメージを

持っているかと思っています。

どうしてこのようなイメージになってしまったのかというのが私の疑問です。福澤諭吉の名を世に高からしめた著作が『学問のすゝめ』です。三百四十万部売れるベストセラーになりました。明治維新期の日本の人口は三千五百万人ですから、十人に一人が買ったということになります。その『学問のすゝめ』の影響力が大変に大きかったことが一つの理由だと思えます。もう一つは『福翁自伝』にいわゆる「門閥制度は親の敵で御座る」という強烈なメッセージがあります。

福澤の父親は無類の学問好きだったようです。中津藩では漢籍では彼にかなう者はいないというほどのレベルに達したのですが、門閥制度に遮られたために、学問を通じての社会的上昇は不可能であり、失意の生涯を送りました。

父親は福澤がまだ子供のときに死んでしまったので、直接聞いたわけではないのですが、母親から「下級士族の子供では出世できない。学識に応じて出世

できるのはお寺だけだから、諭吉はお寺の小僧にしてやろう」と父親が言っていたということをお母の順から何度も聞かされて育ったそうです。「門閥制度は親の敵で御座る」という表現はいかにも迫力のあるメッセージです。

旧社会への憤懣を押さえきれず、親の仇を討つために西洋の学問の修練に努めるほかなしと長崎に行つて蘭学の修得に努め、さらに大阪に行つて適塾に入り緒方洪庵に才能を見出され、東京に出てきて英学に転じ知識人としてのスタートを切りました。

『学問のすゝめ』や『福翁自伝』から伝わってくるイメージが、福澤の真実をどれくらい伝えているのか。実は、この世に一般的な福澤イメージは、戦後の左翼リベラリズムが「造作」した福澤像だと思います。リベラル系知識人が好んで福澤を取り上げるのですが、自分の思想の淵源が福澤にあるのだという権威づけのために、意識的にか無意識的にか、そういう福澤像をつくりあげたのでしょう。それが、中学や高校の教科書に載っている一般的な福澤のイ

メージになってしまったのではないか。私は、福澤思想はもつと多面的、多層的な思想だと思っていま

榎本と勝を批判する「瘠我慢之説」

わたなべ としお

昭和十四年、山梨県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業後、同大学院経済学研究科博士後期課程満期取得退学。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授などを経て拓殖大学国際開発学部学部長、同大学学長および総長を歴任。



専門は開発経済学・アジア経済である。日本思想史にも造詣が深い。著作に、『神経症の時代』（文春学藝ライブラリー）、『アジアを救った近代日本史講義』（PHP新書）、『土魂―福澤諭吉の真実』（海竜社）、『決定版 脱亜論』（青嶋社）、『死生観の時代』（海竜社）など。

す。この咸臨丸が官軍の砲撃に遭い、乗船員七名全員が死亡しました。しかし、倒幕軍の目を恐れて、死亡した七名を弔う者は誰もいない。そこで、侠客清水の次郎長の山本長五郎が子分を使って死体を引き上げて清見寺に埋葬し、のちに殉難碑を建てました。

福澤はその碑に線香を立てて鎮魂の祈りを捧げます。そして碑の後ろにまわると、なんと榎本武揚の名前で「食人之食者死人之事（人の食を食む者は人のことに死す）」と書いてあるのに気づいて驚愕したのです。徳川家の禄を食んだ者は徳川家のために死すべきだと書いてあったのです。これを見た福澤は、腸が煮えくりかえり、踵を返して東京に戻り、一挙に認めた論説が「瘠我慢之説」です。

榎本武揚は、江戸城開城後に軍艦八隻を引き連れ品川を脱出して函館に入りました。そして五稜郭に立て籠もって蝦夷地政府を樹立するにいたりますが、官軍との戦いによってほぼ全滅。榎本は官軍に捕獲されて東京に護送され、禁固刑に処せられました

このような福澤イメージの対極になっている論文が二つあります。一つは明治二十四年に脱稿された「瘠我慢之説」です。これは、榎本武揚と勝海舟の出処進退のあり方を徹底的に難じた文章です。この内容を読むと、冒頭に申し上げたような福澤のイメージがずいぶん怪しくなってきました。福澤が「瘠我慢之説」という論説を書くにいたった理由には、次のような事情があったからだと思われれます。

明治維新によって徳川藩は駿府城に移されていたのですが、福澤はその後のこの藩がどのようなものか気がになり、明治二十四年秋に東海道を南へ下ります。そして、清水港の近くの興津にある清見寺に立ち寄ったのです。そこには「咸臨丸受難諸氏記念碑」があると聞いていたからです。

日米修好条約のために使節官が軍艦に乗ってアメリカに渡ったとき、それを護衛した小さな船が「咸臨丸」です。福澤はその船に乗せてもらい、サンフランシスコまで行きました。戊辰戦争の頃、咸臨丸は清水港で幕府の運搬船として使われていたよう

た。しかし、ほどなくして赦免を受け、その後は新政府で文部大臣、枢密院顧問、外務大臣、農相大臣と、トントン拍子で位を極めていくのです。

福澤は、碑の前であの榎本がそんなことを、後世に残る石碑に刻み込んでいいのかという憤怒を抱いたのだと思います。そして自宅に帰って一気に「瘠我慢之説」を書きます。

維新の際、脱走の一挙に失敗したるは、氏が政治上の死にして、仮令いその肉体の身は死せざるも最早政治上に再生すべからざるものと観念して唯一身を慎み、一は以て同行戦死者の霊を弔して又その遺族の人々の不幸不平を慰め、又一には凡そ何事に限らず大挙してその首領の地位に在る者は、成敗共に責に任じて決して之を遁るべからず、成ればその榮譽を専らにし敗すればその苦難に当るとの主義を明らかにするは、士流社会の風教上に大切なことなるべし。即ち是れ吾輩が榎本氏の出処に就き所

望の一点にして、独り氏の一身の為めのみにあらず、国家百年の謀はかりごとに於て士風消長の為めに軽々看過すべからざる所のものなり。

榎本に従った部下たちのほとんどは、官軍への投降を拒否して無惨な死を遂げています。その部下をそのままにして、明治政府で位を極め、かつ咸臨丸の碑に「人の食しょくを食はむ者は人のことに死す」と刻み込むとは何ということか。怒気を含んで福澤はこの文章を書いているのです。

勝海舟についても、ほとんど同じ評価を下しています。一般的に、勝という人物の官僚や政治家としての能力には高い評価が与えられていて、勝海舟が好きな人は少なくないと思います。しかし、福澤は勝の出处進退のありように侮蔑に近い感情を露わにしております。

後世の国を治る者が経綸を重んじて士気を養わんとするには、媾和論者の姑息を排して主

は信じられないほどの卑劣な口調で批判しています。そのような逆風のなかで、福澤のみは西郷を懸命に擁護しようとしたのです。

私が持っている西郷のイメージは、近代化を誰よりも強く望む一方、その近代化を推進するリーダーの資質は、旧士族社会の道徳、つまりは土風、士魂の持ち主でなければならぬ。指導者が土風、士魂をなくしたならば、西洋列強の勢力から日本を守ることができないう、我々は西郷の持っていた土風、士魂に注目しなければならぬと福澤は論じたのです。その論説が「丁丑公論」です。

西郷は少年の時より幾多の艱難かんなんを嘗なめたる者なり。学識しよしきに乏はしと雖なども粗野ならず、平生の言行温和なるのみならず、如何なる大事変に際するもその挙動しよくどう綽しよく々然ぜんとして余裕あるは、人の普あまねく知る所ならずや。(中略)薩の士人は古来質朴率直を旨とし、徳川の太平二百五十余年の久しきも遂に天下一般の弊風に流れず、そ

戦論者の瘠我慢を取らざるべからず(中略)然るに爰こゝに遺憾いごんなるは、我日本国に於て今を去ること廿余年、王政維新の事起りて、その際不幸にもこの大切なる瘠我慢の一大義を害したることあり。即ち徳川家の末路に、家臣の一部分が早く大事の去るを悟り、敵に向て曾て抵抗を試みず、只管和を講じて自から家を解きたるは、日本の経済に於て一時の利益を成なしたりと雖も、数百年養い得たる我日本武士の気風を傷やぶうたるの不利は決して少々ならず。

西郷を評価する「丁丑公論」

榎本武揚と勝海舟という二人の人物の出处進退のあり方を徹底的に批判する一方、西郷隆盛については、深い敬愛の念を持っています。西郷こそ土風、士魂の人物であるとし、その西郷をこれほど簡単に逆賊の汚名をそそいでいいのかと主張しています。ときの政府、ときのジャーナリズムは西郷を、今で

の精神に一種貴重かたきの元素を有する者と云うべし。(中略)薩に居る者は依然たる薩人にして、西郷、桐野の地位に在るものにも衣食住居の素朴なること豪も旧時に異ならず。

「門閥制度は親の敵で御座る」と言った福澤の主張とは明らかに異質の主張が「丁丑公論」や「瘠我慢之説」では書かれているのです。

福澤論吉という人物の真実はどこにあるのか。我々は左翼リベラリズムが充満する風潮のなかにあつて、彼らがつくった福澤論吉像を正しいものとして受け取っています。しかし、そんなことがあつていいはずはない。

幕末の三十三年と維新後の三十三年を生き、六十六歳で歿した福澤が、最後にどのような思想にたどり着いたのかを押さえることが何より重要なことだと私は思うのです。

「明治150年」記念シンポジウム

平成二十九年十月二十九日
「明治150年」記念シンポジウム実行委員会主催

パネルディスカッション

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）

阪本是丸（國學院大學教授）

松元 崇（元内閣府事務次官）

新保祐司（文藝批評家）

文明は手段である

金子 基調講演で話し足りなかった部分、そして他のパネリストの発言を聞いてのご意見、ご質問などがあるかと存じます。

まずは渡辺先生からお願いいたします。

渡辺 先ほど言い残したことが二点ほどあります。

但話に青螺が殻中収縮して愉快安堵なりと思
い、その安心の最中に忽ち殻外の喧嘩異常なる
を聞き、窃に頭を伸ばして四方を窺えば、豈計
らんや身は既にその殻と共に魚市の俎上に在
りと云うことあり。国は人民の殻なり。その維
持保護を忘却して可ならんや。近時の文明、世
界の喧嘩、誠に異常なり。或は青螺の禍なきを
期すべからず。この禍の憂うべきもの多くして
之を憂る人の少なきは、記者に於て再び不平な
きを得ざるなり（「国権と民権」）

民権論が貴重であり、いずれ実現しなければなら
ないということは、福澤もよく知っている。だから、
福澤はその思想の根本においては民権論の側に立つ
のですが、西洋の力が東に及んで来ている「西力東
漸」のこの時期において、民権論者の立場に立つと
いうことがいかに非現実的であるかはつきりと指
摘しているのです。福澤がいかに理性的な人物かと
いうことがわかります。

金子宗徳（亜細亜大学非常勤講師）

皿木喜久（産経新聞客員論説委員）

田沼隆志（元衆議院議員）

まず一点目。国権と民権に分けた場合、福澤論吉
を民権論者だと捉える見方が多い。福澤は、民権は
大事だと思っけていますが、国体のこと、国柄のこと
を論じずに民権のことばかりをいくら議論しても仕
方がないと、はつきり言っております。

このような例え話をしています。

もう一点。日本の近代の諸文献のなかでトップ・
スリーは何かと知識人に問えば、だいたい『文明論
之概略』がそのうちの一つに入ります。私も福澤を
勉強してみても、『文明論之概略』が彼の一番情熱を
注いだ、格調の高い名文だと思えます。しかし、多
くの人は『文明論之概略』とは文明の「至大至重」
——これ以上大事なものはなし——を説いた本であ
ると説明するのはです。日本も西洋と同じ文明国にな
るべきだと説いた本だとなるのです。

たしかに一章からずつとそのことが書かれていま
すが、最後の最後に、目的は独立であって、文明は
そのための術であると言っているのです。福澤に
とって目的は文明ではありません。文明は独立のた
めの手段なのです。文明を導入しなければ真の独立
国家になり得ず、列強確執のこの時代において一人
前の国になれないということを言いたいがために、
九十九パーセントを文明が至大至重だという主張に
充てているのです。

その反転のありようは見事だと思っております、多

くの人はそのようには論じていない。左翼リベラリストが『文明論之概要』をいくら読んでも、文明の方しか目がいかない。反転の絶妙なテクニクが見えない。見るべきものが見えてないと私は感じています。

新保先生の話を、深い劣等感を持ちながら聞いていました。昭和一桁生まれまでの知識人であれば、漢籍が読めました。漢籍から得る表現的確さ、感情の豊かさは他の文献に明らかに勝ります。現在の知識人とかつての知識人を比べてみると、現在の知識の方が劣ると思います。漢籍への理解度の違いです。その辺のことを、もう少し深く聞いてみたいと思っています。

天皇の神聖性

金子 次に阪本先生、お願いいたします。

阪本 今年（平成二十九年）は、三條天皇、伏見天皇、後陽成天皇の式年大祭でした。このような山陵での

お祭りは、明治以前からありました。それを宮中三殿でもお祭りするようになったのが明治維新のときです。漢籍や古典を読める国学者や神道家たちが歴史を考究して、山陵の修復を行ったり、皇霊殿をつくったりして現在の形となり、今日にいたっているのです。

これこそが福澤諭吉の言う、皇室の神聖、尊厳性の源です。したがって、福澤が天皇は政治社会であると言ったのは、宗教ではなく、国の成り立ちそのもののことなのです。

今年二月、皇太子殿下が後奈良天皇の般若心経について触れられました。後奈良天皇は伊勢の神宮に、大嘗祭が行われなかったことは自らの不備であると奉告なされています。これがなければ神聖性がありません。

明治の人たちは、なぜ大仏に神聖性があり、どのようにしてその神聖性を維持していけばいいのかを考え、また経世の世についても考え、相反するようでもお互いのいいところを採り、理解し合ったので

す。そして、現在の天皇や皇室の神聖性を考えたのです。

その最たるものが五箇条の御誓文です。本来は、天皇と諸侯たちの盟約にすぎなかったのですが、それではダメだということで、天地神明、天神地祇に誓うことにしたのです。これを言い出したのは福羽美静です。こういった人たちがいなければ、おそらくは西洋流の契約になっていました。せいぜい王権主義です。しかし、日本は王権主義ではありません。昭和天皇が那須のご用邸でおっしゃったように、五箇条の御誓文は皇祖皇宗から現在まで伝わっていることを誓ったのです。

日本の歴史をきちんと顧みればわかると思うのですが、明治維新以前は仏教で、それ以後は神道になったというわけではないのです。このような皇祖皇宗からの歴史が日本の政教関係の源になっているのです。

金子 松元先生、よろしくお願いします。

松元 先ほど、山縣有朋が嫌われたことに関連して、言論の自由について少し話しましたが、明治時代は本音で議論をぶつけ合っていたと思います。

財政史の観点から見ると、山縣は日露戦争前の地租増徴を実現させ、日露戦争を勝利に導いた人物です。日清戦争に勝った後に三国干渉を受けて、ロシアが出てくる。これに対抗しなければならぬ。イギリスも危機意識を持ちます。日本は極東の弱小国なので、軍備増強をするにも資金不足なので増税するしかない。当時の一番の税金は地租でした。地租増徴に伊藤博文がトライしましたがダメでした。財政の第一人者と言われた松方正義がトライしてもダメ。そして伊藤がもう一度トライしましたが、やはりダメ。そこで山縣がトライして、ようやく実現しました。このことにより軍備をしっかりと整えることができ、バルチック艦隊を破り、日露戦争に勝利したのです。

本音で議論した明治時代

ロシアに勝利できたもう一つの背景には、高橋是

清がしつかりと起債して、そのときの戦費を支えたということがあります。

この二人が、日露戦争を勝利に導いた財政的な立役者です。

山縣は、ぎりぎりのところで日本が生き延びたということ、この時代にどうやって日本が生き残っていたかわけではなく、さまざま議論をしながら国が成り立っていたのだと思います。

明治維新のときから、建前だけで国が成り立っていたわけではなく、さまざま議論をしながら国が成り立っていたのだと思います。

福澤諭吉は西郷隆盛を高く評価していますが、大久保利通も大きな役割を果たしています。西郷だけでなく、やはり大久保利通もいて明治国家が成り立っていったのだと思います。

昭和の「侍ニッポン」という歌があります。「きのう勤皇、あしたは佐幕、その日その日の出来心」という歌詞です。薩摩藩は最初は佐幕で、幕府を支援していたのです。それが突然勤皇になり、長州藩と一緒に尊王攘夷と言って、幕府を倒す。攘夷です。

するコメントも含めてご発言いただきたいと思えます。

新保 芥川龍之介が中学生のとき、授業を聞かないで本を読んでいた。先生が本を取り上げると、白文の漢文の本でした。芥川は返り点もない漢文を読んでいたのです。また、夏目漱石の傑作は、小説ではなく漢詩だという人もいます。明治の文豪には教養があったのです。

明治の面白さはここです。彼らは、西洋文学や英語を学ぶことが大事で、漢詩をやっても頭が堅くなるだけだと言いながら、実は彼らの血肉になっていたのは漢詩、漢文の教養だったのです。この絶妙なバランスによって、明治の文学がつけられた。頭では西洋文学をやるうとしていますが、血肉は漢詩だったのです。

その血肉がなくなってしまうということが現在の問題です。漢詩、漢文の教養などいらないと思っ

から、外国人を追い出すのです。ところが、幕府を倒すと攘夷ではなく開国をして、その先頭に立った。建前を捨てたのです。実は、昨日言っていることと今日言っていることがまったく違っているというなかでできあがったのが、明治国家なのです。

そういう状況下で、万機公論に決すべしと本音で議論し合っていました。言葉尻を捉える議論ではありませんでした。それが、日露戦争後の頃から本音の議論をしなくなってきたのではないかと思えます。それでも、山縣有朋は本音で議論し続けた。だから嫌われるようになってしまったという気がしています。

さて、質問なのですが、明治時代に言論の質が変わったという印象をお持ちかどうかについて、渡辺先生にお聞きしたいと思います。

漢籍の教養

金子 続いて新保先生に、渡辺先生からの質問に対

なければ、真の伝統の継続ができないという難しい問題を抱えているのです。

富岡鉄斎の絵には讚が書いてあります。鉄斎は、自分は絵描きではなくて学者だから、まずは讚を読んでくれと言っています。にもかかわらず、讚が読めないから、ほとんどの人は絵として見てしまっているのです。そして、この色がいいとか褒める。これは印象派です。日本人は印象派が大好きです。それは、本格的な西洋絵画がわからないからです。日本人は精神性を失って、印象派の感覚人間になっている。だから歴史に対しても、印象派になってしまっているのです。

鉄斎の言いたかったことは讚に書いてあるのです。それを読まなければ、なぜ鉄斎が絵を描いているのがわからない。今の教養は、これほど貧しいものになってしまった。だから過去を振り返るにしても、非常に歪んだ評価をしてしまう。

明治のことを考えるならば、やはり明治の教養についても考えなければならぬと思います。

印象派とは、西洋絵画の衰退期なのです。西洋絵画のピークはレンブラントやベラスケスです。近代日本の不幸は、たまたま十九世紀の後半の西洋とぶつかったことにより、そのときの西洋がいいと思つて、衰退期の西洋を学んでしまった。

心ある人たちは十八世紀の西洋を学べと言っていますが、多くの人は十九世紀後半の衰退期の西洋をもってヨーロッパとしたのです。これが近代日本の不幸です。

明治の精神に到達するには、漢詩、漢文を学ばなければなりません。

金子 松元先生から渡辺先生へのご質問がありました。松元先生、ご質問をもう一度お願いいたします。

松元 『坂の上の雲』でも、日露戦争に勝つてから時代が変わってしまったと言っています。財政的に見ても、日露戦争後に財政が非常に苦しくなるのですが、政府が国民にそれを説明できなくなり、本音の議論ができなくなつていったように感じられます。

を拘束する力まで持っている。漢籍が持っている特有な言語体系があります。言語体系があつて思考体系ができるので、言語が思考を規定しているのですが、そのための言語と思考が明治にはあつたと思いません。

昭和一桁ぐらいまではあつたと思うのですが、その時代を超えて生まれた私の思想が軟弱なのは、これが理由ではないかと感じました。

もう一つ、新保先生の話を聞いていて面白いと思つたのは、日本が文明化、西洋化するとき、西洋が衰退期にあつたということです。衰退期にあつたものを日本は精神的なものとして受け入れてしまつた。

おそらく、美にはある完成期があるのだと思います。例えば、音楽でベートーヴェンやバッハのあたりについて一つの完成期（ピーク）があり、その後は衰退している。

漢籍を自由に読みこなせる知識人がいた時代とそうでない時代と分けることができるかもしれませ

五箇条の御誓文の基本的な感覚は違わないにしても、議論が上滑りになってきたような印象を持っているのですが、渡辺先生はいかがでしょう？

渡辺 松元先生の感覚は、やはり司馬遼太郎に近いのではないかと思います。司馬遼太郎は『坂の上の雲』を書いたあと、歴史物を書くのをやめてしまします。そして、紀行文に移っていききました。

司馬遼太郎はなぜ、『坂の上の雲』以降の時代を書く気になれなかったのか。おそらく、侍の時代が終わつて官僚の時代になったからではないでしょうか。日露戦争を戦つた將軍たちはいずれも侍、旧武士でした。しかし、それ以降は幼年学校などを出た学校秀才が軍人になりました。司馬遼太郎は、それ以前の強靱な日本人になりました。司馬遼太郎は、それと感じ、関心がなくなつたのではないかと。

新保先生の話を聞いて改めて考えてみました。漢籍は漢字で表現します。漢字は究極の表意文字です。その言葉のなかに自分の思考を整えるメカニズムが備わっているのではないかと思います。思考

ん。この漢籍という一つの切り口からの文藝批評をやつてくれる若い人が現れてほしい。そして、そのような若手の思想家を発掘して育ててもらいたいと思います。

大正よりも明治の文学を評価する

金子 新保先生の話を聞きながら思つたことがあります。

漱石の継承者の一つに白樺派があり、白樺派の一人に倉田百三がいます。倉田は一高在学中に人間の存在意義について煩悶はんもんして、あるときは西田哲学へ行き、あるときは西田天香へ行き、心を病んで森田正馬まさたけのところに行つて、最後は日本主義に回帰します。このような近代的な自我をめぐる煩悶が明治文学の帰結だという気がします。それが昭和維新の時代になると、影山正治まさはるや保田與重郎など昭和維新の文学が出てきて、述志を強調するようになりつます。つまり、自我にこだわつた拳げ句に錯乱して



パネルディスカッション

しまった人がいて、次の世代はその失敗を乗り越えようとした。そういう流れがあったのです。

昨今、メンタルヘルスだとかブラック企業が問題とされています。「非凡なる凡人」のように我を捨てるのではなく、我にこだわるといふ方向性になっているわけです。けれども、そこに未来はあるのだろうかと思いました。

そこで新保先生に、白樺派をめぐる近代的自我について何かコメントをいただきたいと思っています。

新保 今、左翼リベラリズムの側は大正時代を評価しています。津田左右吉や吉野作造など、大正の文化人を評価しています。大正時代は自由でお金もあり、大正デモクラシーだったと評価しているのです。

私は大正よりも明治を評価しなければならぬと思っています。大正文学とは志賀直哉や武者小路実篤などの白樺派です。文学をやっている人間にとつて、志賀直哉は神様で、ほとんどの作家は志賀直哉の文体に影響を受けたと言われています。たしかに文章や見る目の鋭さはあります。

ら回復したのだと捉えています。

明治の政教関係

ただ、考え方についてはダメです。乃木大将が殉死したときには、あまりものを考えない女中が考えもせずにバカなことをしたという気持ちがあったと日記に書いています。

武者小路実篤は学習院で講演しています。志賀と武者小路は学習院出身です。乃木大将が院長だったということが反感の要因の一つなのでしょうが、ゴッホの自殺は世界的だが乃木さんの自殺はローカルだと講演しているのです。なぜかゴッホと乃木大将を比べています。そして、ゴッホの方が偉いと言っている。ゴッホの自殺には世界的な意義があるけれども、乃木大将の自殺はローカルな日本の古い風習だとしているのです。

大正時代は白樺派の考え方が通用したのでしようが、昭和に入ると小林秀雄や保田與重郎が出てきて、乃木大将に対する考え方がガラッと変わります。小林秀雄は、乃木大将は内村鑑三と同じように最も純粋な明治な精神の典型だと評価します。

私は、大正時代のおかしい部分が昭和になってか

金子 私の曾祖父の兄に金子彌平という人物がいます。幕末に岩手県に生まれ、若くして福澤諭吉の門を叩き、福澤家の書生となり、慶應義塾で学びました。卒業後は大蔵省に入省し、松方正義のもとで修行し、ニューヨークに留学してもいます。乃木希典が台湾総督であったときに国語伝習所の所長心得を務め、その後実業の世界に転身し、最後は田中智学門下になりました。田中智学の主宰する雑誌に「東山」という号で多くの漢詩を残しています。そういう一人の明治人を思い起こしながら、先生方の話を聞いていました。

そこで阪本先生に、明治や近代の宗教史における田中智学の位置についてお伺いしたいと思います。阪本 明治の宗教家の一人として田中智学を挙げたのだと思いますが、田中智学の八紘一字については

す。それはなぜか。大隈はポピュリストなので、とにかく憲法制定より先に議会を開いて、議会で憲法を決めようと主張しました。しかし、政府は先に議会を開けばとんでもない憲法ができるのではないかと、大隈を追放したのです。大隈を追放した一人が山縣です。山縣不人気の理由はここらにもあるのではないかと思います。

しかし私は、大隈を追放したのは、明治の人たちの立派な判断だったと思います。

金子 山縣有朋の名前が出てきましたので、松元先生にコメントいただきたいと思います。

松元 私もその通りだと思います。大隈重信は英国流です。山縣は、もとを辿れば英国ではあるのですが、日本の当時の段階からすると、大隈の主張通りにすると国がおかしくなってしまうと考えたのです。

大隈の人気の一つには、借金をしてでもやればよいという大隈の考えがあると思います。ただ当時は、外国から借金すれば関税徴収権や鉄道敷設権を奪

われて植民地にされかねないという怖れがありました。アメリカからグラント大統領が来日したとき、明治天皇に「外国から借金してはいけませんよ」とアドバイスしていました。

大隈と山縣の葬儀の日程は非常に接近していました。山縣が亡くなったことは「死もまた社会奉仕」とまで言われました。新聞などは大隈は国民葬で山縣は国葬で「民」がない、同じ日比谷公園なのに人が全然集まっていなくてと揶揄しております。しかし、ポピュリストでない山縣はそれでも構わなかったのだと思います。

国民の一体感形成に重要な歌

金子 元衆議院議員の田沼隆志先生もお越しです。田沼先生にもコメントいただきたいと存じます。

田沼 今回は「明治百五十年記念」ですが、昨年は「明治の日を実現しよう！ 院内集会」が議員会館で開催されました。私は唯一、落選中でしたが発言させ

ていただき、その発言を『國の防人 第一号』に収録していただきました。私が人生初の予算委員会で冒頭に質問したのが「十一月三日を明治の日に正すべきだ」という質問でした。それまで、国会でこの質問をした国会議員がいなかったようで、最初に明治の日について言及したという縁で、その院内集会にお呼びいただいたのだと思います。

現在、十一月三日が「文化の日」となっているのは、何の歴史的根拠も正統性もありませんので、私は今でも「明治の日」に正すべきだと思っています。

菅官房長官も「関係施策を総動員していく」と発言していますので、十一月三日を「明治の日」にしようという気運は高まりつつあります。しかし、国民全体の気運はまだまだ低いので、何か対策や改善策があればお尋ねしたいと思います。

また、私は合唱団を二十五年やっています。音楽が好きで、新保先生のおっしゃっていた「海道東征」も聞きました。以前の祝日は音楽と一緒に。紀

元節には紀元節の歌がありました。しかし、現在は紀元節という祝日ではなく建国記念の日になっており、その歌がありません。だから国民が一体となく、その歌がありません。だから国民が一体となく、明治節にも、明治節の歌がありました。

国民が心を添えるときに、歌は大事だと思っています。『國の防人 第一号』三十八頁では赤池先生が「四十八年前の明治百年の時には『のぞみあらたに』という唱歌をつくっているのです」と発言しています。そこで、私は「のぞみあらたに」を歌いたいと思っただけですが、見つかりませんでした。

歴史の回復や国民の一体感を形成するときに、やはり歌は非常に大事だと思います。

金子 それでは、新保先生にコメントいただきたいと思ひます。

新保 今はいいい作曲家がいません。新たにつくってもいいのですが、変な曲をつくられても困ります。そこが難しい。黛敏郎先生がご存命ならば、つくっていただけたかもしれません。

芸術は二流だと最悪になります。私が「海ゆかば」

去年（平成二十八年）の「昭和前期の神道と社会」で何十人かの若い人たちが研究していましたので、若い人たちの研究に任せたいと思います。

私は島地黙雷もくらいという人物の評伝をミネルヴァ書房から出しました。島地は政教関係など日本の近代の仏教史などに関わる、長州出身の西本願寺の僧侶です。幕末維新期から明治まで生き抜き、日露戦争のときは熊本に日露戦争の大事さを『戦争論』で指摘しています。また、明治の時代には大内青巒せいらんや島田蕃根など、尊敬される宗教者が多くいました。このような宗教者をはじめ、明治時代の知識人の多くは漢籍も仏籍も読むことができたのです。

明治天皇に象徴される明治人の生き方は、やはり「非凡なる凡人」だと思います。京都帝国大学で漢籍をやっていた狩野直喜は、学生が白文で読んできたら、「こんなものは諸橋轍次の辞書見てやっていたら、あんまり信用できんよ」と言われたそうです。これぐらいの漢籍の大家がいたのです。このような市井の学者、埋もれた学者が大勢いたの

が、明治という時代だったのです。

それが、学制など近代化され、塾としての学問がだんだんなくなっていくところ、明治の特徴と終焉があるのではないかと思います。政教関係や神道に関して言えば、明治時代には偉いお坊さんもいたのですが、それ以降はほとんどない。国柱会は特殊だと思えます。

葦津珍彦先生が、明治維新と東洋の解放など、明治維新から大東亜戦争敗戦までを書いていきます。司馬遼太郎が流行る以前の話ですが、葦津先生が「健全なナシヨナリズムは明治で終わっている」と言われました。私は「そのあとは不健全なナシヨナリズムなのですか？」と訊きました。すると、悩んでいました。

明治とはこのような時代だったのです。

山縣が不人気の理由

金子 フロアに有識者がお越しです。産経新聞元論

説委員長で、『明治という奇跡』を上梓された皿木喜久先生にコメントをお願いいたします。

皿木 最近、明治維新に対する批判めいた意見が出てきています。『明治維新という過ち』の著者である原田伊織さんは、あのまま明治維新が起きていなかったら、日本はもっとすばらしくなっていたと言っています。

徳川慶喜が、犠牲となって大政奉還をしたのに、薩長はこれを受け入れなかった。逆に新政府からこれを排除してしまった。これが慶喜の同情をひいて、明治維新批判論になっているのではないかと思いません。

私はあたらしい歴史教科書をつくる会の副会長をしているのですが、その機関誌「史」で明治百五十年シンポジウムを行いました。そのときに文芸評論家の澤村修治さんが、「その二年半ほど前に、孝明天皇や有力な藩の藩主や一橋慶喜が会って、国をどうすればいいかなどについて話している。このときに侃々諤々話し合ったが結論が出なかった。だから、

西郷らは、最後の選択肢として、王政復古になだれ込んだ」と言っていました。武士も公家もなく、神武天皇の時代に戻って新しい国にしようとしたというわけですね。

西郷らは私利私欲ではなかった。自分は嫌われ者になっても、国家再生をやらなければならないということをやったのです。澤村さんの発言に溜飲りゅういんが下がり、改めて明治維新とは何かを理解しなければなりません。と思いました。

もう一つ。私は山縣有朋が不人気の理由の一つに大隈重信の人気があると思います。この二人はほとんど同時期に亡くなっています。大隈の葬式には二十万から三十万の参列者がいたのですが、山縣の葬式には千から二人しか参列者がいなかった。この二人はさまざまな面で対比されますし、性格もまったく違います。大隈がものすごい人気だったので、対照的に山縣は人気がなかったのではないかと思います。

明治十四年の政変で大隈が政府から追放されま

にこだわるのは名曲だからです。このような名曲だからいいのです。同じ時代につくられた軍歌でも、よくない曲はたくさんあります。すばらしい歌はいのですが、そうでなければ逆効果になってしまうのです。

音楽をめぐっての運動は非常に大事です。ですから、今まであったすばらしい曲を再評価して、それを現代的に変奏して、現代的感覚で復活させていくのがいいのではないかと思います。

交声曲「海道東征」は現代聞いてもすばらしい名曲です。このような曲が一曲でも残っているということが奇跡なのです。だから、これを活かしていかなければならないと思っています。

明治維新をきちんと見直す

金子 最後に、パネリストの各先生方にコメントをいただきまして、このシンポジウムを締めくくりたいと思います。

渡辺 百五十年前に一体何が起こったのかを再確認しなければなりません。

最近『明治維新という過ち』という本なども出てきました。史料はいくらでもあるので、因果仮説を新しくつくれば、いくらでもストーリーを組み立てることはできます。そういうもののワン・オブ・ゼムだと思っています。

私の見る明治維新とは何か。世界全体の情勢を鋭く観察して、革命を起こさざるを得なかったということだと思っています。江戸時代は二百数十年続きましたが、典型的な封建制社会、つまり権力分散型社会だったのです。徳川幕府というけれども、徳川が諸藩のなかで最も強い権力を持っていたので中央政府を担ったのですが、原理的に言えば徳川も二百数十藩のうちの一つでしかありませんでした。ヨーロッパの列強が東洋に押し寄せてくる。そのようななかで、分散的な社会の日本ではこれに対抗できないという判断が指導者のなかであって、大政奉還や廃藩置県がなされたのです。

権力分散的な多元的社会を一元的社会に変えていく。つまり、明治という時代を用意したものは何であつたかを議論すべきです。徳川幕府を倒して新政府をつくり、新政府があれほどの力を持ち得たのは、旧体制が新しい体制を支える人材を用意していたからです。これが実は封建制なのです。封建制をポジティブに評価するという空気は日本では薄いのですが、封建制は現在、先進国と呼ばれている欧州の数ヶ国と日本だけが持っていた制度なのです。それゆえ、これらの国々では、アンシャン・レジームを壊しても、次の体制をつくることができた。権力の代替ができたということなのです。

このような権力の交代がなかった場合、日本はどうなったのかを考えてみると、清国や朝鮮と同じように悲惨な運命を辿った可能性が高い。日本のみがアジアで生き延びた理由がどこにあるのだろうかという視点で明治を洗い直してみると、明治維新が過ちだったという結論にはなりません。私が発言したような結論になるのではないかと思います。

阪本 私は岩倉具視をきちんと評価できないと、明治維新の本当の意味はわからないと思います。王政復古の号令も国権制度も、皇室祭祀も憲法も、岩倉がいなければできませんでした。ところが、岩倉神社はありません。

私は、有名であつてもマイナスの評価しかされていない人たちが掘り起こしていくことが必要だと思います。

昔、『新勢力』という雑誌で大原康男先生と対談したときに、「私は歴史的仮名遣いを守ることが日本を守ることである」と言ったことがあります。私は「神社新報」論説主幹として、この運動を続けています。

松元 明治維新も生身の人間がやったということを知ることが大事だと思います。渡辺先生が廃藩置県のことに触れましたが、この直接の担当者は山縣有朋だったので、山縣が西郷隆盛に相談すると西郷は「おいどんの方はようござんす」と答えた。西郷隆盛は陸軍大将で圧倒的な力を持っていたの

で、それで決まったのです。山縣は山縣屋事件という汚職事件があり、西郷に助けられていました。そのような生身の人間が、試行錯誤しながら明治国家をつくりあげたということを知ることが大事です。

新保 ペリーの黒船が来てから明治維新まで十五年。ユダヤ民族に、モーゼが出エジプトしてから「荒野の四十年」がありました。四十年も荒野を彷徨って、志の低い人たちは脱落していくのです。そして、残った人たちだけで動いていく。

私は幕末から明治維新の動乱期までは「荒野の十五年」という深い意味を持った時代だと思っています。日本民族に与えられた試練だったのです。そこで脱落せずに残った者たちが明治維新を成し遂げたというイメージで明治を捉えると、明治という時代はかけがえのない時代です。ですから、ぜひとも十一月三日を「明治の日」に改めてもらいたいと思います。

金子 本日はありがとうございます。